層大きい。周圍の樣子を視察する爲、赭山に登つた、此山は花崗岩より成つて居る、其の赭く見ゆるのは鐵分を多く含めるためであらう。空盒晴雨計とヒプソメーターとで測つたが、高さ三千三百五十呎ある。頂上より下界を瞰るに、一の大氷河は其南方が內陸に延長し、北東の氷堤に合せんとして大なる波を生じ、長さ數哩に亘りて、氷堤の面に凸凹を起して居る、氷河を旅行するは氷堤を行くより龜裂が多くて困難も甚しい、然しバリャーの上は南緯八十六度以上には行けない。さて此の氷河の旅行で困難を感ずるは馬の處分である。午後五時海拔二千呎の高さに達した。

大氷河

十二月五日午前八時前日遠望した大氷河へ下つた。其の表面には龜裂が多くて、馬のソックスに橇を曳かすのは頗る困難である、よつて之を曳かすことを見合はせ、ワイルドは馬を引き他の三人は初め一つの橇次に他の橇を曳いた、南緯八十三度四十分の場所で鳥を見たのは不思議であつた。是はスクワ鷗らしかつた、多分死んだ馬の肉があるから來たのであらう。

十二月七日ワイルドは馬を引いて歩行中、馬と共に氷河の龜裂に陷つた、ワイルドは辛うじて助かつたが…馬…ソックスは永久に見えなくなつた。十二月八日、一行は二千三百呎の高所に在つた。同九日マーシャルが龜裂の中に陷つた、やがてアダムスも落ちた、シャックルトンも落ちた、形勢は非常に危險になつて來た。此處は南緯八十四度二十分、其日の正午海拔二千五百呎の位置に達した。一行の最も懸念したるは食物の問題であつて共に十二月

二十五日のクリスマスを頻りに待つて居つたのでも、如何に食物に困難して居たかゝ分る、それは其の日には充分食物が食へるからである。

十四日午後六時海拔五千六百呎に上り、十六日は南緯八十四度五十分に達した。是まで龜裂せる氷河を横ぎること約一百哩、世界最大の氷河を攀ぢ登ること六千呎、西南西に山脈を望み、氷河と山の展望が甚だ廣くなつた。

石炭の發見

十二月十七日、ワイルドが附近を視察して採集したる地質上興味ある標本中に石炭があつた。其質は良好で無いにもせよ、確かに石炭に相違ない。此の發見物が確かに石炭であるならば、學術界に採り最も興味がある、ワイルドの言ふには、此の黑色の物質は砂岩と雜つて、厚さ四吋乃至八吋位に及び約六つの層がある、されば母岩は砂岩であつて、恐らく是が最も南の岩石であらう。

ワイルドの遠望しる高原に達せば、最早土を見ることがあるまい、高原の位置は海拔六千一百呎である、一行が後日ニムロッド號に歸つた時、デヴイツド教授に此の標本を示した所が、石炭もあり泥炭もあると言つた。

南極高原

十二月十八日は高度七千四百呎に達した。此日の旅行は最も困難であつた、各自交代で橇を曳きつゝ進むだ、行程十九哩終に高原に上ることが出來た。南極へは未だ三百地理里あるのに、糧食

は今は五週間分しかない、此の夜の氣溫は華氏十六度を示した。十九日の夜七千八百八十八呎に達した。氷面の龜裂はまだ隨分澤山ある。氣溫は華氏の九乃至十五度で、此の地は南極より二百九十地理里の距離がある。一行は益々クリスマスの御馳走問題を待つて居た。

廿日氣溫五度乃至七度、海拔八千呎、其位置は南緯八十五度十七分であつた。此の日晝飯には少許のチョコレットと茶とコ、アビスケット三個を取つた。一日中の行程十一哩九百五十ヤードであつた。此の週間はシャックルトンが賄方をやる番であつた、二十一日は太陽の最も南極に近き日で溫度廿八度午前六時四十五分より午後六時迄進行繼續中晝飯に一時間を費し、海拔八千呎の高位置より氷河を瞰下した、氷河は東西に延長して居る、中にも

一萬五千呎の諸高山を望むは壯絶であつた。一行は何れも無事で元氣が溢れて居る。二十二日は、氣溫零下五度。二十三日八千八百二十呎に上つた、龜裂の危險なるものが非常に多くて、誰か彼かゝ絶えず落ち込んだ、此の日行程十三哩、南緯八十五度四十一分で、正午氣溫六度午後六時は零下一度で夜に入り更に降つた。二十四日は、天氣珍らしく好く、高度海拔九千九十五呎に上つた、明日はクリスマスであるから、孰れも故郷を懷はないものはなかつた、倫敦の賑かさに引換へ、四人は人跡絶えたる南の果なる高地の一小天幕内に居る、思へば感慨胸に逼り轉た懷舊の情に堪へない、行程は十一哩二百五十ヤードである。

クリスマス

十二月廿五日、南緯八十五度五十五分に達した。シャックルトンは皇后恩賜の旗を樹てゝ一行を撮影した。氣溫は零下十六度を示した、此の日夕食は仲々盛であつた、スコットランドの友人より贈られたCreme de menthe（薄荷液の一種）を一匙づゝ頒つた、又葉卷煙草をも喫せしめた。此の夜食物は何れも積日の渴望を醫して餘りあつた。食後又々自今糧食の分量を減ずることに決定をした。此の處より南極迄の往復には約五百哩ある。此の日一同の故郷を思ふ情は、クリスマス丈に尙一層痛切を加へたのも無理はない、二十六日の行程十四哩四百八十ヤード、高度九千五百九十呎、廿七日は七哩で殊に嶮しき丘陵をなせる大氷原に出た。若しもこれを高原と言ひ得るならば、一行は、終に是に達したのである、高度海拔九千八百二十呎であつた。一行の橇にて曳く重量は一人に

二百五十斤、行程十四哩九百三十ヤード、氣溫零下九度であつた

山嶽病

廿八日位置は益々高くなつた、若しも氷堤が變化する海ならば、高原は變化する空であるとの感じが起つた。其の高度一萬百九十九呎　其の位置は南緯八十六度三十一分、其日の行程十四哩四百五十ヤードであつた、アダムスは前より頭痛を覺えた、シャックルトンも多少之を感じた、其の外の二人は無事であつた。此の日の豫想では、翌二十九日は十五哩位進行する見込であつたが、出發後一時間後でさへ正確に豫言が出來ぬ程の氷面狀態であつて、此行程漸く十二哩六百ヤードで終つた。次の日は南風强く氣溫は華氏氷點下四十四度乃至四十九度、高度一萬三百十呎であつて、

シャックルトンは終日甚しき頭痛を覺え、アダムスは風邪に冒された。頭痛の起るのは高度の地に在るが爲に生ずる一種の山嶽病である、又他の者は鼻より出血した。夜に入りてマルシャルが一同の體温を計つたところが約九十四度であつた。これから南極迄は百九十八哩ある、一人の負擔する重量は百五十斤であるが、高原の百五十斤は氷河の時の二百五十斤よりも遙かに困難なる仕事である。三十日は、午前七時出發、十一時には猛烈なる南の暴風に襲はれ、僅かに四哩百ヤードの地で屯營することになつて、終日天幕の中に氣を揉んで居つた。貴重な食物は次第に減じて來るし、時間は少くなる、實に氣が氣でない、三十一日の夜南緯八十六度五十四分に達した、氣温は零下七度高度は海拔一萬四百七十七呎、全日の行程十一哩であつた。此の日シャックルトンは終日

烈しき頭痛を覺えた、食物の不足か亦大ひに一行を苦しましめた。

食物彌々缺乏す

往復約五百地理里に對し今僅に三週間分の食物と二週間分のビスケットを餘すのみである。此の夜の如き、餘りに疲勞のためシャックルトンは日誌に筆を執ることは出來なかつた、一行のものは孰れも顏の周圍を氷に包まれた、眉毛も鬚髯も頭髮も頰も。一同次の二週間天氣の好良ならんことを天に祈つた。髯につく息の凍るに最も困難した、寒さが斯く强きものと知つたならば、鋏を持參して時々髯を剪ればよかつたのに。

毎日、腹が、減る、身體は、次第に、衰弱する、常に念頭にかゝれるは食物の事ばかりである。乾酪よりもチヨコレートの方が永く口中

で減らぬだけ斯る場合の食物としては好良であることを知つた。一行はビスケットを茶に浸して食つた。千九百九年一月一日シャックルトンは非常なる頭痛を覺えた、此の日の行程十一哩九百ヤードで南緯八十七度六分半に達した。一行何れも皆食物缺乏のため非常に弱つた。今は極を距る僅かに百七十二哩半此の地の高度一萬七百五十五呎であつた、一月二日は旅程頗る困難を極め、海拔一萬一千三十四呎、行程十哩四百五十ヤード氣溫零下十四度であつた。進行中一行のもの時々躓き倒れた、四人中最も元氣なるはワイルドであつた。

南進の困難

一行は皆斯くなつては頼むは唯神明の力のみである、若し高原

が此有樣にて繼續し、愈々高度を增すものとせば、前途甚だ氣遣はしい。シャックルトンは同行者の生命に關し、愼重に考慮する義務がある、是より一層前進せば、此の高原より歸ることは不可能なるべく、其の時には探檢隊折角の苦心の結果は、一切世界より失はれることゝなる、南極の位置が世界最高の高原に在る事は確である。是迄やつた地質學と氣象學上の觀察は學術界に最も大なる利益を與ふることであらう、然かも未だ南極そのものに達した譯ではない。身を切るが如き南風は進行を困難ならしめ、十時間も進行の後日僅かに二個のビスケットと一杯のコーアとでは、到底身躰に溫度を與へることは出來ぬ。今は食物も時間も減じつゝある形勢は次第に非である、シャックルトンも茲に考慮を要することゝなつた。一月三日午前六時五十五分出立した、此日は曇天

で氣溫は零下八度であつた、午前中は道が甚だ嶮しくて僅に五哩百ヤード進行した許りで、正午の位置は南緯八十七度二十二分であつた、午後道が少しくよくなつたので、午前よりも多く進んだ。午後六時の氣溫は零下十一度で仝六時三十分屯營した、其地の高さは海拔一萬一千二百二十呎であつた。翌一月四日は進行の終局に近づいて來た、此の先精々進むも三日間しかやれぬ、氣溫氷點以下四十七度で、一行の身体の衰弱は、實に甚しい、特に食物の缺乏と雪を吹き寄せる南の猛烈なる風とは、到底耐えられぬ程である、一行の進行も最早終に近つきつゝあることを明に示した。正午体溫を檢するに一行中の三名は華氏九十四度に減じた、それであるから一層皆寒氣に弱つて居る。此の日の行程十二地理里半七十斤の重量も前日の百斤以上に、否三週間前氷河を登る時の二百五十斤よりも遙かに重く感じた。是は一行の身体の日に增し衰弱しつゝあることを示すものである。又高度一萬一千二百呎に達して風は身を切る樣に冷たくある。

此の高原を旅行するは、盛夏の候でも少くも一人一日四十オンスの食物を要するであろう、然るに、今は此の一行は三十二オンスといふ普通の分量である。此の夜の氣溫は華氏二十四度であつた、翌五日午前五時一行の体溫華氏九十四度であつた。午前七時出發晝食一時間を除き午後六時迄進行を繼續した、氣溫氷點下五十度此の日行程十三地理里半であつた。高原に達して以來、時は盛夏なるに拘はらず、氣溫零度以上に出でたることは一度も無い。一月六日は橇と屯營裝具とを携帶して進行すべき最後の日である、氣溫氷點下五十七度、强烈なる吹雪にも拘はらず尙行程十三地理

里四分一を進んだ。食物の分量を少しく增したりとはいへ、決して充分とは行かない。馬に食はすべき玉蜀黍も食ひ盡した。此の夜南緯八十八度七分に達した、夜風强く最早進行の最後に近づいた。當時シャックルトンの感想は如何であつたらう。最早一行の前進を許さぬは自然の數である。翌七日終日眼も眩むばかりの烈しき雪風が吹き荒むだ、氣溫は實に氷點以下六十度乃至七拾度、一歩も天幕外に出づることが出來ぬ、一行は坐して食物を食ひ減らすばかりだ、風の速力は一時間に八十乃至九十哩であつた。一行は眠ることさへしない、風の止み次第に南へ南へと出來得る限り進んで、旗を樹てゝ後歸路に就くのみである、唯心配なのは、元來た路が雪の爲に消えはせぬかと云ふことであつた、此の氷雪の大海原には陸地の目標が無い。一行の事業は、實に危險であるが

極度迄やらねばならぬ、上帝は善に與みして一行を護るであらう、一月八日、吹雪のため又もや終日臥巢中を出づることとか出來ぬ、身体は手足の寒さと饑との爲め、精神は前進の出來ぬため、一層苦痛を感じた、一行は只慄へつゝ横はつて居るのみである。氣溫は氷點下七十二度を示し、風の速力は一時間七十乃至八十哩であつて、此の地の高度一萬六百呎を示した。今は讀むべきものも無い、少し許りの書物も荷物を減らすため補充舍に遺して來た、餘りの寒さに、日誌さへ書き得ずして天幕の中に横つて居つた。

終局點に達す

一月九日は前進の最後の日である、午前一時風が止んだ、二時起床朝食を終り四時出發した、皇后陛下恩賜のユニオンジャック

の國旗と、南極の果に遺し置くべき印紙と書類とを入れたる真鍮の圓筒と、カメラ望遠鏡及羅針盤を携帶した。午前九時、南緯八十八度二十三分に到着した、最近の烈しき吹雪に困りたる雪の上を半は走り半は歩みて、先づ恩賜の國旗、次に他の萬國旗を樹て、英國皇帝陛下の名に於て此の高原を占領した、ユニオンジャックが旗は、骨を透す烈風の中に翻々として翻り、南極の天地を睥睨して居る。

一行は強度の望遠鏡を手にして遠く南の方を望んだ、眼界唯荒涼たる白き雪野の景のみである。高原は極の方に延長するも何等の之を妨ぐるものあるを見ない。一行の達し兼ねたる目的地の南極は此の高原に在ることを信じた。數分間其處に滯在の上皇后陛下の旗を撤去し、僅かの食物を喫して、悄然歸途に就き午后三時頃前夜の屯營地に歸着した。一行は最早疲勞の極に達し午後僅に二時間進行せしのみで、五時三十分屯營休息した、氣温零下十九度であつた、幸にも元の道は吹雪に消え失せなかつた。嗚呼一行の遺憾は如何に大なるにもせよ、其心身を捧げて最善を盡した、勇士の最后は之れに範を取るに餘りある。況んや其の軀を全うして其の使命を果すは萬人の難しとする所である。

歸途に就く

一月十日、午前七時三十分出發終日北進した、行程十八地理里半、風の爲竿につけ置きたる旗は影だも止めないが、元の道を辿ることの出來たのは幸福であつた。此の皚々たる大荒野に食物を遺したるは頗る危險のことである。一行を導くものは唯橇の道跡

だけてある、當日の氣溫は零下九度を示した。十一日は零下拾五度であつた。拾二日行程拾四哩百ヤード、拾三日拾五哩一千六百五十ヤード、氣溫零下十八度。シャックルトンの兩方の踵は凍傷によつて裂けた。十四日行程二十哩千六百ヤード、此時氣溫零下拾八乃至二拾一度を保つたことが拾時間であつた。拾五日氣溫零下二十三度行程二十哩、所によりては元來し橇道の跡は、全く消えて痕跡もない處もあつた、午后三時三十分休憩したときにスレッジメター Sleege meter（橇に附着せしめ自然に進行距離を計答し得る器機）の紛失せるを發見した、是は是非もなき非常な損害であつた、氷堤上に於ける距離は皆之に依て計算してあるのだ。尤も別に尙一つ氷河の麓に置いて來たものがあつたから左程困りはしない。十六日行程十八哩半、シャックルトンの踵傷は終日疼

むだ、此の日約三週間ぶりで再び陸地を見た。十七日氣溫零下二十三度、行程二十二哩半。十八日行步甚だ進みて二十六哩半、其夜の氣溫零下十四度、此の日シャックルトンは氷の龜裂に陷り非常に肩を傷めた。十九日行程二十九哩高度七千五百呎に降り、氣溫夜に入り零下十四度であつた。二十日進行に隨分困難した。二十一日行程十七哩氣溫零下一度、二十二日行程十五哩半、二十三日氣溫八度。二十四日行程十六哩。

殆んど絕食

二十五日行程二十六哩、食物が盡きた。翌日は是非共貯藏所迄達しなければならぬ。二十六日を過ぎ、二十七日の夜は二日目で初めて因形體の食物を口にした。二十六日午前より二十七日午後

二時まで十六哩の間最も困難なる氷面を歩み、最も危險なる龜裂に出遇つた、時々茶やコヽアを飲むために足を停めたのみで一氣に二十時間進行を續けた。雪の深さ十吋乃至十八吋時には二呎半にも達した龜裂の中に陷ち込むと幾回だか知れぬ程で、此の四十八時間に於ける肉體及精神上の苦痛は、これを表はすに言葉も筆もない。二十八日終に氷堤に達した。

劇列なる下痢症

此處で六日分の食料が手に入つた。ワイルドは下痢を起した、其の原因は不明であるが、或は馬肉を喰つた爲かも知れなかつた、シャックルトンは雪で隱れて居た龜裂に落込んだ、此日溫度二十六度、二十九日の溫度三十度で雪が降つた、けれどもそれが融け

て凡ての物が濡れた、三拾日行程拾三哩、ワイルドは意氣大に沮喪した、當日の溫度二拾四度好天氣であつた。三拾一日はワイルドの病氣が惡かつた、行程十三哩半。翌一日行程十四哩。二日は行程十三哩半、シャックルトンも亦下痢に冒された。三日貯蔵所にて新しき橇を得、百五拾斤の重量を加へ午前八時四拾分出發した。下痢は馬肉に原因したらしい、今は醫療の法も無い、これを治するには睡眠が必要である、ワイルドの病狀甚だ不良である、此の日の氣溫拾五度であつた。四日一同劇しき下痢に罹り進行不可能であつた。五日行程八哩病氣は少しく快方に向つた。六日行程九哩幸ひにして下痢も止つた、此日の氣溫九度。七日アダムスとマーシャルが再下痢に罹つた、八日行程拾二哩、アダムスとマーシャルの下痢は尙止まなかつたが、ワイルドとシャックルトン

は無事であつた。。チャイナマン（死せし馬）貯造所へ六拾一哩。九日行程拾四哩半。拾日行程二拾哩三百ヤード、氣溫二拾二度、翌日行程拾六哩半氣溫二拾度。翌日行程十四哩半氣溫五度乃至二拾度拾三日貯藏所に達した。死馬チャイナマンの肝臟を食ふたが、其美味なる事言はん方なかつた、此の行程拾二哩、翌日氣溫十度乃至十八度、行程十四哩四分三。十五日はシャックルトンの誕生日である。パイプ用の煙草を粗末なる紙に卷いて作つた……紙卷煙草を贈つた、行程十二哩半正午の氣溫零下三度。十六日十三哩氣溫零度乃至零下七度十七日は目を眩ます吹雪で、氣溫は氷點下四十二度、行程十九哩。食料は漸次缺乏する。翌日正午の氣溫零下二十度午後ヂスカバリー山を見て、甚だ懷かしさに堪へなかつた。十九日氣溫零下二十度終日寒く且つ饑を感じた、行程十四哩四分一。早朝にはエレバス山を見、午後六時屯營した氣溫零下十度、翌日午后四時豫定通りA號貯藏所に達した、行程十四哩、氣溫氷點下五十二度、其の夜好き食事にありついた、此所には卷煙草も刻煙草もあつて其の風味言ふべからずであつた。ブラッブ貯藏所 Blubb Depot には更に食糧が貯藏されて居る筈である。

人跡を認む

二十一日、氣溫氷點下六十七度、烈しき寒風であつたが二十哩を歩いた、極地で斯る天氣に二十哩も旅行するといふことは非常なことであるが、是は食物が前に在るのと、死が背後から一行を襲撃する爲であつた、此の夜死馬グリシーの肉を骨より削り取つて食つた。二十二日好天氣で二十哩半を進んだ、午前十一時、人と

犬の足跡を雪の上に見た、所々に紙卷煙草の吹殼をも見受けた。彼等の晝飯の屯營地を過ぎ、元の貯藏物に着いて從來の物と違ふ商標のある鑵が捨てゝあるのを見て、船が入つて來たと想像した、又チョコレートの小さな三片と少許のビスケットの片を看出し、種々の推想を馳せた、是は如何に一行の人々が原始人の樣であつたかといふことと、一片の食物でも人の頭腦を苦しましむる問題となることを示して居る。

二十三日好天氣である、ワイルドはブラップ貯藏所の歷氣樓を見た、しかも程近く見えて旗は風に翻り、來て食へと云ふ樣に思はれた、ワイルドは死馬グリシーの肉の爲めに又々下痢を起した、午後四時一同は貯藏所に達した、先づこれで食物の心配は無くなつた、此の次は船に達する問題のみである、食物は中々美味のものがあつた、カールスバット、フラム、玉子、菓子、プラム、プディング、ジンジャ、ブレドッや船より持つて來た者と思はるる蒸したる羊肉抔がある。長い間夢みて居つた食物も今は事實となつた。

一月五日、船の着した趣を知らすべき手紙もあつた。此手紙は本年一月二十一日付であつて、エヴアンスの署名がしてある。エヴアンスはクーンヤ號でニムロット號を曳た船長である、此の日の氣溫十度。二十四日十哩進んだ。今は隨分曳くべき荷物の重量があつても、饑えたる時の輕き荷物よりは遙かに樂であつた。スコットやウイルソン時代の探檢隊の經驗に鑑みて、過食せざる樣大に注意した。アダムスは中々の健啖家であつた。ワイルドの下痢も此の日少しく快方に向つた、彼は食物に最も注意した。

シャックルトンの先發

二十五日午前四時起き出でた、マーシャルは胃に苦み又下痢を起した、若し此の夜マーシャルが恢復せねば、シャックルトンはアダムスと彼とを遺して先に出發せざるを得なかつた、然らずば船は三月一日には出帆するかも知れぬのである。二十七日午前二時朝食を取り、一同四時に出發して午後十一時迄進行を續けた、行程二十四哩、此日マーシャルは下痢甚しく進行不可能となつた、午後四時、シャックルトンはアダムスに此病人を托し、自分はワイルドと共に前進するに決定した、ワイルドとシャックルトンとは午後九時より進行し、二十八日午前二時までに白島の北東端に達し一時間半休憩し、午前十一時迄進行を繼續した。此時食物が

既に欠乏した。オブサーヴエーション丘 Observation Hill に見張つて呉れると思はれた人々の注意を惹かんがため、反射鏡を輝したけれども何の合圖もない、午後二時三十分海が見えた、ケープ・アーミテージ Cape Armitage の南四哩は氷も碎けて居つた樣である、一時間半後に至り吹雪になつた、或る一隊が近づきつゝある樣に見えて橇も輕く感じたが、何の夫は人間ではなくして氷の端に居るペングイン鳥の一群であつた。それから又も進行を續けて終にカッスル・ロックに達し、午後七時四十五分、スキー・スロープ Ski Slope の頂上に達した、其處は冬營の小屋と灣とを見るに都合が好かつた。然るに、船の姿も煙もなく又小屋に人の住む樣子も見えぬ、兩人は小屋へと脚を急がせた、心には樣々の悲觀的の考へもないではなかつた。

ニムロッド號に歸着す

さて、小屋に着いて見ると人が一人も居らぬ、但し北進隊の磁極に到着した事を知らせる書面があり、尙船は二月二十六日迄はトング氷河 Glacier Tongue に避難して居る筈と云ふ事も書き添へてあつた。今は二月二十八日である、實に心配しながら食物搜索のために進行した。若しも船が既に出帆したとせば、一方はシャックルトンとワイルド一方はマーシャルとアダムスの運命は共に非常な事になる、眠るに臥褥は無し實に困難なる一夜を送つた。夜の明けた時の喜びは非常であつた、やがて船の姿が見え凡ての心配が一度に去つた、然し夫は船の歴氣樓が現はれたのであつた。先づ反射鏡で合圖し、互に信を通じ、三月一日午前十一時、無難に

ニムロッド號に乘込むことが出來た。シャックルトン一行が行衛不明であると思はれて、其の搜索隊を出したとの話を聞いたが、一同其無事なのを見て擧つて歡聲を揚げた。凡ての計畫も滿足に實行され結果も良好であつた、流石のシャックルトンも重荷を卸した氣がした、早速マーシャルとアダムスの救助隊を派遣すべく命令を下した、シャックルトン自身も、亦ニロッド號にワイルドを殘して、午后二時三十分マッケー、モーソン、マクギロンを同伴し、午後十時迄進行し、一睡後の三月二日午前一時二人の居る場所へ着いた、マーシャルも大に快方になり、一同歸途に就き、午後八時迄進行し、翌三日午前四時再び進行を續け、午後三時氷の端に着いた、マーシャルは再び下痢に惱み午後九時五十分冬營地點に達して一行の介抱を受けた。其の內に船も見えて、シャッ

クルトンはアダムスと共に之に乘込むだ、三月四日午前一時北進隊の殘員も濠洲の救助隊も一同皆安全に乘船出帆した。千八百九年五月八日シドニーを發し、同八月三十日本國のテームス河に入つて大歡迎を受けた、實に出發より二十五ヶ月目であつた。

附　南極探檢隊の諸費用

費途	金額
漁船ニムロッド號購入代	五萬　圓
倫敦に於けるニムロッド號の修繕其他	二萬五千五百圓
リッテルトンに於ける全上諸費	七千四百　圓
南極初航後リッテルトンに於ける修繕費	九千五百七十圓
船漁鐘大工甲板の諸設備費	二万五千四百四
救助船	四千九百　圓

糧食	一万八千二百圓
船長　士官　船員俸給	五萬六百　圓
石炭代	一萬五千二百圓
ニムロッド號經常費水先寮内料其他	一萬三千六百六十　圓
保險料	八千六百三十圓
陸上隊(十六人)二年間の費用	四萬二千九百六十　圓
陸上隊救助設備	三千二百八十圓
陸上隊二ヶ年分糧食	二　萬　圓
全探檢隊員(四十八)一ヶ年分救助糧食	一万八千　圓
陸上隊俸給	六萬六百　圓
濠洲馬十五頭購入代及輸送費其他	一萬五千百七十圓
エスキモー犬九頭氏及飼養料	一千二百六十圓
銀行利子其他	二　萬　圓
陸上隊員探檢隊事務長ニューヂーランド往復船賃	一萬二百　圓

四千四百卅圓	旅費
一萬四千八百四十圓	陸上經常費(事務長俸給　事務所家賃通信料其他)
二千六百四十四	倫敦　濠洲　ニューヂーランド間電報料
四十四萬三千四百四十圓　以上總計	

南極と北極

二　シャルコーの南極探檢

佛國西のシャルコー T. M. Charcot は、同國の南極探檢船プールコア・パ號に搭乘し、南進してブンタ・アレナス Punta Arenas に達し、西曆千九百八年十二月十七日同地を出帆し、同千九百十年二月十一日同港に歸着した。プールコア・パとは、何故に能はざるかとの意である。

此の探檢は、南極に近づかなかつたが、科學上の効果は、重大であつた樣である。其の主なるものは、先づルーベット島 Terra Louis の海岸を精しく測量し、此の海岸に沿ひて、本探檢隊の主要の目的たるアレキサンダー第一世ランドの連絡點に達し、それより アデレード Adeluine 島を完全に測量した。

アデレード島　西曆千八百三十二年、ビスコエ Biscoe が發見した島である。其の當時、此の嶋の大さは十五粁と測定されたが今回の實測によつて、百三十粁の長さに達することが分つた。

此等の探檢を終りて、ベルジカ海峽の口に當れるペーテルマン島に於て越年した、此の地は、嘗て千九百五年、シャルコーの前回の探檢に際し、フランセー Francais 號の越年したるワンデル Wandel 島に近い處である。

千九百九年夏の屯營中は、プルコア・パ號は、從來僅かにクック

とゼルラッシュの兩氏により、一部分だけ探檢されたる西部の海面に向つて重要な海上探檢を試みた、此の際は流氷の情況が大分良かつたから、船は南方に進むことが出來て、南緯六十九度と同七十一度の並行圈の中間にて西經百二十六度の地に進航した。クックが到着した點は、西經百七十度に過ぎなかつた。

斯くて、探檢隊は南米方面の南極大陸 American Antarctic の主たる山塊に就て、主要なる觀察をした。此の山塊は南西に連亘するものである、即ちヴイクトリア・ランドの方向に向へるもので、シャックルトンが調査した原の南東に走れる山脈と同一物の樣である。此の兩個の山塊即ち地皮の皺曲部は、其の中間なる廣大なる未探檢區內に於て連續するものと想はれる。

此の探檢は隨分困難であつた。最初に船は暗礁に乘り上げ、又流氷や氷山のため破損した、船中では澤山の病人も出來た、越年中も、屢慘事が出來して非常な困苦を嘗めた。然し、此の一行はまだ本國に歸つたばかりである、其の視察の結果を此の書に記載することの出來ぬは誠に遺憾である。

一二　南極地方に於ける現今の智識

南極大陸の地形

南極大陸は總論の部に於て已に之を記して置いた。シャックルトンの調査によれば、マックマード灣頭の上陸點から大氷河を經て南方高原に至るまでの東西兩側面には著しく澤山の高山があつて、特に東の方の山脈が壯大である。先づロッス海の東の方を望めば、アドミラルティー山脈 Admiralty Range や、プリンス・アルバ

南極と極南

ート山脈 Prince Albert mountains が相連り、無數の山々が屹立して居る。中にもメルボーン山 Mt. Melbourne(8337呎) ナンセン山 Mt.Nan-sen(8000) ボーウェン山 Mt. Bowen(4100) スミス山 Mt Smith クリーク山 Mt creak(5200) ダヴィドソン山 Mt. Davidson(8127) 英吉利山 Mt. England(7440) エヴァンス山 Mt. Evans(4508) 等の諸山がある。これからヴィクトール灣の奥に續いては、前にスコットが到着した處までは右側には、ハッギンス山 Huggins(1287) クック山 Mt. Cook キスカデアリー山 Mt. Discovery(8085) ハームスウォース山 Mt. Hermsworth コンウェー山脈 Conway Range ブリタニア山脈 Britania Range などが連つて、中には一萬呎以上の山もある。其の南方のクイン・マレキサンダー山脈には、高い山がなか〳〵多くあり、先づロングスタッフ山 Longstaff(1035) ライド山 Mt. Ride(10350) ミラー山 Mt.Miller

南極と極南

アーン山 Mt. Allen yong (9450) スミス山 Mt. Smith (8367) ハキウクス山 Mt. Fox(8882) イダー山 Mt. Ida(11540) アンネ山 Mt. Anne(10271) エリザベス山 Mt. Elizabeth (10761) マケラー山 Mt. Mackellar (9950) ベル山 Mt. Bell(10484) クローディメーカー山 Mt. Cloudmaker(9971) キルクパトリック山 Mt. kirkpatrick(14624) ドーマン山 Mt. Dorman(13500) アダムス山 Mt. Adams(11809) マシャール山脈 Mts Marshall(10494) ワイルド山 Mt. Wild(11217) などがあり、又氷河の左側には、パトリック山 Mt. Patrick (6245) ダドレー山 Mt. Dudley (7580) ヂーキン山 Mt. Deakins (9094) キンセー山 Mt. Kinsey (11000) ウエストミンスター山 Mt. Westminster (11570) アイヴェー山 Mt. Iveagh (11228) サンダース山 Mt. Sounders(11507) ニムロッド山 Mt. Nimrod(10495) ワード山 Mt. Ward (10543) などの山々が聳えて居る。

此の氷河を登れば、八千尺乃至九千尺を經て、南緯八十八度半あたりは已に一萬尺に達し、これから極の方まで一樣の大々的高原である。氷河の右側の山脈は、或は極附近を越えて反對の方まで續いて居る樣にも見えた。ナンゼンは、これにキング・エドワード七世高原の名を附した。盖しクイン・アレキサンダー山脈の命名と共に自國の至尊の名を紀念とする忠義心からである。

他の方面から考へても、此の一大陸は沿岸から次第に一歩一歩高まつて、極の高原に達するものと考へられる。輕氣球を南極地方に於て初めて飛揚したドリガルスキーもそれより南極大陸を下瞰して同樣の意見を陳述した。

古の南極大陸

現在南極大陸は此の樣であるが、古の南極大陸はどんなであつたらう。地質時代の現狀は如何。

西暦千八百九十三年、ラセルンがシーモア島で化石を發見した、次でノルデンショルドが水成岩を發見し、ロッス島其他附近の地でアンモン貝其他の化石を見出し、脊椎動物の化石を見つけた。其の一行の他のものも亦化石を見つけたことがある、又スコットは、二千尺の厚き砂岩を認め、其一行のフエラーは此の層から植物質の化石を發見したことがある。シャックルトンは今回の旅行中砂岩の厚層を認め、針葉樹の化石を採集し、四吋乃至八吋の石炭層數多を發見した。

我が地球上の一番古い岩石は、地質學上大古代といふ時代で、片麻岩結晶片岩などである。日本では秩父や赤石山系、紀伊半島

飛彈高原や中國などで見ることが出來る、南極大陸のヴイクトリアランドでは己に片麻岩を發見した、又スコットは厚さ二千尺の砂岩を認めた。ノルデンショルドも始めて水成岩を發見した。此等に據りて考へると、南極大陸は今こそ氷雪の下に埋沒されて、慨れむべき荒涼たる現狀を呈して居るものゝ、往時の有樣は淺しで今の樣なものではなかつた。

石炭はいふまでもなく昔の植物が炭化したるものである。已に石炭のある以上は、其の時代には植物が盛に繁茂して居たに相違ない。植物が繁茂するには溫度が今の樣に寒くてはいかぬ、氷雪が地上を掩ふ樣では迚てもそんな望みはない、それ故に此の石炭時代は餘程今より地軸の向が違ひ、太陽がたとへ眞の南極の上に直射せぬ迄も餘程熱くあつたに違ひない、從て生物も澤山住んで

居たらう。然るに時代は變遷して今は寂滅の天地となつた。

嘗ては、グラハムランドから南米迄接續した時代もあつた、今こそ其の間は斷れて澤山の島になつて居るが。

南極の火山

然し今でも全く寂滅の天地ではない、エレバス山の如き、高大なる複式火山が盛に活動して居る。テロル其の他の火山も多く見える。又グラハムランドに行くと、南極アンデス山系中に死火山がある。玄武岩や粗面岩の火山岩も見える。其の北方の島嶼にも活火山がある。氷雪が全土を掩ふて居る極地に於て、火山の活動するものは一層壯觀なるものである。

氷堤（アイスバリヤー）

南極に有名なものは、數百里に連つて南極大陸を取り卷くアイスバリヤー即ち氷堤である。直立數千尺に達し壯觀を極めて居る南極上陸の困難なる一つの原因をなして居る。其の成因に就てもノルデンショルドの考説は既に記して置いたが。シャックルトン一行のデーヴイッドは極の地方に降る雪の堆積に由て形づくられた物で、決して氷河の氷でない、南極から其の降り積れる雪の氷が次第に移動して海岸に達するものだと考へた、彼はスコットの遺物の北方に移動したのもこれがためだと斷言して居る。此の見解は、初めヂスカヴアリー號の撮影したる寫眞から提起せられたがデーヴイッドの證言は彌々之を確かめた。南極地方一ケ年間の降雪は、雨の七吋半から九吋半に等しく、雪の七呎半或は九呎半であらう、然し解決に苦しむのは、此等の氷が永く海水中に現存することである。北極方面の氷は海中では直ぐ溶解するが、南極方面のものは極めて遲い。これは淡水の氷は海氷と異りて、急に溶解せないものであらうが、其の何故に斯の如き差異あるかの物理的性質はまだ判明しない。

寒氣の減却及氷山

此の氷堤は、近頃次第に退却しつゝある、スコットは已往六十年間に二十海里乃至三十海里南の方に退却したことを確かめた。今後も退却するであらう。此の氷堤の退却は、無論寒氣の減少を意味する、何となれば氷雪の供給充分であるならば、決して此の

様に退却即ち減少する筈が無いからである。

此の氷の堤は其の端になると時々破れ落ちて海上に浮び、氷山となる、口繪にある如く、平たきテーブル狀の大氷堤で、其の幅二三百哩の廣大なものがある、氷の浮島である。

由來北極の氷山は峨々として巍然たるを特徴とし、南極のものは平たく且廣大なるを本性として居る。これは其の成立が違ふからである。北極の氷山は、多くは氷河の端が海に落ちて出來るが南極のものは、廣大なる氷の堤の一部が切れて出來るからである。

南極の生物

ニュージーランド附近にブラック・バック Black back 一名ドミニカン鴎 Dominican が澤山居る、又鵜も見える、天信翁や海燕の類は南

極圏までの間に澤山居る、又南極圏附近には黑き嘴と足の外は雪の如く白き海燕と、白と茶褐色のアンタークティック海燕は、實に南極圏地方の寂寞を破つて居る。海豹やペングイン鳥も居る。ロッス海附近には、鯨が夥しい。エムペラー・ペングイン鳥 Emperor penguin は見馴れぬ訪問者を見て驚いて居る、スクア鴎 Skua gull も居る。

苔や菌類は、湖水や堆石より發見せらるゝ、顯微鏡的動植物も多い、華氏零下四十度の溫度でも動物は死なぬ、乾いたり、凍つたり、溶けたり、水に浸されたりしても尙且つ生命を持續する。熱湯に投ずるも猶生命を失はぬものもある。ケープ・ロイドには、ウオーター・ベアラー Water bearer もある、是は北極のスピッツバーゲンやフランツヨセフ・ランドのものと同一種類であるといふは面

白き事實だ、然し是はブルースやノルデンショルドの南極探檢隊には發見せられなかつた。

此等の生物中で最も不思議なのはペングインである。

ペングイン鳥は其の種類が澤山ある、其の内最も大なるものは例のエンペラーペングイン鳥で、高さが三呎もある、自分の側に牝鳥を從へて、威張つてよろめきながら歩む樣なか〳〵異樣である。犬を見て叮嚀に挨拶をする。又アデリーペングイン鳥は、威張らないで自分の仕事ばかり一生懸命につとめて居る。此の二種の鳥の擧動の、人間に似て居ることは著しい。多分立つて歩むからであらうが、眞に人の性質を多く持つて居る。先づ南極に於ける文明の住民とでも呼ぶべきか。二種とも巢を造る時には、場所選定の爲めか、幾日も幾週間も、海濱を離れて内陸に旅行する。

エンペラーの方は中々禮儀正しく、同類の他のものや、人や犬などに遭ふと、先づ仲間のものを適當の距離に殘して、年長の牡鳥がて〳〵やつて來て叮嚀に挨拶する。嘴が胸につく位に頭を曲げる、そして何か言ふて居る、但し其の意味は分らないが、それで首を上げ嘴で出來得る限り大きな圓を描き、あとから分つたかと云はぬばかりな顏をして、相手の顏をのぞき込む、若し相手が不審さうにして居ると、又々前の通りにやる、中々恐者を敎へる忍耐に富んでる樣に見える。さうかうする内に、彼方に居る仲間どもは待ち兼ねて、遂に別の牡鳥が出掛けて來て、最初のペングインに、斯うすれば良いのだ、敎へてやらうと云はぬ許りに押しのけて、前の鳥と同一の仕事を繰返すなどは隨分振つて居る、ペングインは人間をも矢張ペングインと思つて居るらしい。珍らし

いものを知りたがつて、自働車や人間を見るために遠くまで出掛けて來る、翼の力は中々強い、一撃人間を傷ける位である。アデリーは中々滑稽だ、水中に飛び込んだ時の擧動は甚だ迅速である、卵を産む時期には中々勇氣づく、巣を造るには小石が必要である之を見出すため隨分遠方まで行く位だから、從つて仲間のものを盗むやうになる。盗むだ鳥は自分が惡いことをしたと云ふを知つて居る、それ故に發覺を恐れる。或る時石を盗んで居る所を持主の鳥に見付かつたことがあつた、すると盗んだ方は其の石を落して、中立地帶からでも極小さき一片のものを拾つたやうなふりをした、彼等には親子も夫婦もない、巣にさへ居れば親子だと思ひ夫婦だと思ふばかりである、其の邊は極めて呑氣なものだ。

南極の海豹は四種類あるが、ロイド岬にはウエッデル Wedell 種

が多い、シャックルトン探檢隊の冬營に近きインアクセッシブルランド Inaccessible Land はこれらの繁殖地であつた。

海綿やイソギンチャクも多い、孰れも黄色である、黄色は此の邊の海中生物に特有の色と見える。甲殼類、海盤車、珊瑚などにも橙赤色又は黄色なのが多い。

南極探檢は、北極探檢よりも餘程遲れて居る。其の原因は澤山ある、北極よりも陸が甚だ尠ない、氣候が惡く且つ北極よりも遙に寒い、海が大荒れに荒れる、氷の堤があつて容易に入り込めない、水産物の利益が少い、此等の事情が集つて南極の探檢に種々の妨害を與へた、併し近頃は南極探檢の全盛時代である。

南磁極は己に發見せられた、エレバス火山は既に調査せられた、ホイン風も分明した、大氣の流動する大体も多少判然した、然し

スコットや白瀬中尉などが、遠からず南極に到達するといても尚は研究の餘地は充分ある、畢竟今日迄の探檢家は僅かに南極大陸の其の一部の荒ごなしをしたに過ぎない。

餘論

一　探檢

探檢の意義

探檢とはどんな意味であらふか、精神一到金鐵を貫ぬくといふ樣な勢で、無闇に山地水澤を跋渉するといふのが探檢であらうか、單に身體の强壯にまかせて、山野をかけづりまわるを探檢といふならば、禽獸や野蠻人の飛び歩くのと選む所はないのである。無闇に危險を冒してはね廻るを探檢といふならば、輕業師の仕事と違はないのである。暴虎馮河の勇は探檢家には禁物である。抑も探檢とは、さぐり檢べる意味である、探檢の檢は木扁である、險

岨の險ではない、危險な處を探ぐる意味ではない、世の人の多くはこれを誤解して居るのである。

探檢家の覺悟

兎角青年は、血氣の勇にはやりすぎるものが多い、無謀の事をやりたがる人が多い、血氣の勇も決して惡くはないが、これを施こすにも之を實行するためにも色々の準備をせねばなるまい、字をかくには筆やペンが必要である、不知案内の道を歩くには地圖が必要である、木を切るには鋸か刀物が必要である、寒さを凌ぐには衣服が大切である、いくら鐵の樣な手でも刀物の代用はせぬ、いくら丈夫な皮膚であつても寒中に夜ざらしは長く續かない。世には探檢を冒險と誤解して居る人間がある、己に探り檢べるといふ意味であるから、充分其の檢べた效果を殘さなければならぬ、其の結果も成るべく之を公表して世を利せねばならぬ。獨りを樂しむ如きは吾人の採らぬ處である。

探檢家たる資格

夫故にもしも世に探檢家たらん希望ある人は、充分なる体力を養はねばならぬ、ヒマラヤの山頂に、攝氏寒暖計の氷點下六七十度の寒氣に抵抗して越年もせねばなるまい、北極の氷上に寒風指趾を落とすといふ場合にも泰然たる決心がなくてはならぬ。然しながらこれは單に体力の談である。體力のみではいかぬ、これだけでは、北海の熊や狐と選ぶ處はないのである。

次に探檢には學術の造詣深きことが必要である。動物を見て、

直ぐにこれは何々動物で、何科に屬して居る、何々獸類と同科であるとか、植物を見てこれは何々であるとか、鑛物を見ても、岩石を見ても、一々之を鑑別する眼孔をもたなければ役に立たぬ。これ等を採集して、之を貯藏する方法を知らねばならぬ。其他大氣の流動即ち風の横樣、雨や雲やあらゆる氣象や地文上の出來事にも一通り通じなければならぬ。

天文測量は、人跡未到の地に於ては最も必要である、これを知らなければ、北極や南極に探檢家となつて進んで行く資格はないのである。彼の昨明治四十二年に、亞米利加で、クツクとピアリーとの兩人が、共に北極に達したといふので、其の先後を爭つたことがあつた。實に紳士の作法を知らぬ爭ひではあつたが、兎に角、輿論はピアリーを眞の北極到達者と認めてクツクを排斥した

吾輩の考へでは、或はクツクも北極に行つたかも知れぬと思ふ、然しそこに重大なる必要問題がある。それはクツクが一大重要なる天文測量の術を知らなかつたことである。たとへクツクが北極に到達したとするも、それは單にクツクの想像たるに止まつて、之を確かめることが出來なかつたからである。犬が一軒毎に人の家をのぞき込んだとて戸籍調の御役には立たぬと同樣である。

次には、到る處の地圖即ち步足圖や看取圖を作ることである、其の附近の地形地質生物等のスケツチを忘れてはならぬことである。これをなすには、圖や畫を書くことが可なり巧みでなくてはならぬ。

尙ほ、探檢家となるに就て必要なることは、語學に通じなくてはならぬ、敢て言語學者たる必要はない、たとひ變則でもかまわ

ぬが、自身の思ふ處を口に現はし、他人の言ふ處を了解すればよろしいのである。

言語はこれでよいとして、次には外交術に長じなくてはいかぬ辭令に巧みで愛嬌が尤も必要である、笑顔は人をひきつける魔力である、よく蒙昧未開の地に於て、土人の襲擊に遇つて身命を落とす人があるが、これは以上の外交術に缺くる處より來る結果が多い。

スウエンヘヂンは探檢家の良典型

スウエン・ヘヂン博士は近世の探檢家である、博士はスウエーデン國に生まれた人で、小學校時代から未來の大探檢家を以て自ら任じて居つた、中學校を卒業するや、直ちに西亞細亞のペルシヤ國に旅行した、此の旅行には隨分困難した樣であつた、歸國後、本國のウプザラ大學に入り、次でベルリン大學、ハレーの大學に入り地理學を專攻して、博士の學位を得た、然し、これ迄學んだ學問は、みんな探檢家たらんとするに必要なるもののみであつた。換言すれば、彼は探檢家とならんがために博士となつたのである、

ヘヂン博士の以上の素養は、中央亞細亞大探檢に於て絕大なる光輝を放つに至つた。それは博士の足跡の及ぶ處、必ず地圖となり、寫生となり、寫眞となり、文學となつたからである。第一回の中央亞細亞大旅行は亞細亞沙漠橫斷記といふ二大冊子となり、十一箇國の國語で翻譯出版せられた、其の純正學術上の記事はペーターマーン地理學報告別冊として刊行せられた。

博士の第二回のタリム盆地及西藏北部の大探檢の記事は、中央

亞細亞及西藏探檢記なる二大冊子となり、前回の如く數多の國語に翻譯せられた。殊に純正學術上の記事は、別にスエーデン國政府の國費を以て、同國の參謀本部より公刊せられた、已に今日まで六冊の浩瀚なる報文と二帙の地圖集とが出てある。

第三回のトランスヒマラヤ山地方の大旅行も、亦、トランスヒマラヤと云ふ二冊の書物となつて世に出でたが、純正學理的のものも遠からず公刊せられて、世の耳目を驚ろかすことであろう。

日本青年に對する希望

我が國人は忠君愛國の念に富んで居る。又學術の研究にかけても、敢て人後に落ちぬ素質を有つて居る。然しながら、永き鎖國の悲しさに、文化が大に泰西に遲れたのである、特に航海術などは甚だしく挫折の厄を蒙つた。我が國から未だ北極探檢も南極探檢も出て居らぬのは、これが一つの原因かも知れぬ、…南極探檢は企てられて居るが。……

由來東洋には東洋風の特長があるが、東洋豪傑ともいふべき一種の豪傑風がある、素放膽大敢で小事に拘泥せずといつた樣な、豪氣堂々四海を呑むとか、長髪藍衣自ら以て誇りとなし、呑まず食はずに天下を横行すべしなどいふ風がある。一つの事を決行するのに、準備も何もかまわずにやり出すといふ風がある。これは餘程注意せねばならぬことである、特に探檢事業に志すものゝ如きは、其の最も然りとするのである。

探檢事業の如きものは、時としては一種の冒險をせねばならぬこともある、好んで冒險をする譯ではないが……。それ故に、之が

準備等は、注意に注意を加へてやらなければならないのである、人事のあらん限りを盡して天命を待つべきである。ボートに乘つて、波風荒き北海に數十百里の波濤を凌がんとする如きは、決して人事を盡したものとはいへぬのである。

我が同胞は、此の點にかけては、甚だしく遺憾の點が多い。今其の一二の例を擧げよう。

無謀の擧に生命を失ひし實例　一

山岳會員其他愛岳家諸君が、日本アルプスと呼んで居る山岳が、飛驒と信濃の間に屏風の樣に横つて居る、……飛驒山脈とも云ふが……此の山脈中には澤山の火山……御嶽や乘鞍嶽や鎗ケ岳や蓮華山などの山々が、其の弱點部を衝いて噴起し、此の山脈をいやが

上に高からしめて居る、山頂の高度も一萬尺内外である、夏になつても殘んの雪は消へ切らぬ處も多い。寒さは三伏の節、尚ほ腐にしみ渡る程である。斯る山岳に登るには、案内の地圖の必要なことは申すまでもない、食糧の携帶は無論である、其の上に防寒具は最も必要である、然るに數年前、二三の學生が、案内者に連れられて其の一峯なる乘鞍岳に登山した。すべて、山嶽は登る時には其の勞苦甚しいから、誰でも汗が流れて瀧の如しといふ有樣である、然しながら之を我慢せぬと山頂に行つたときに取返しがつかぬことゝなる。この書生連は、これらの注意を怠つて出發した、山麓より山腹あたりまでは暑さは烈しかつた、防寒具の入用は無論なかつた、共に其輕裝なのを喜んで居つた、然しそれは樂喜びてあつた、山頂目掛けて進みに進んで、次第に自分の位置も

甚だしく高くなつた、最早頂上まで遠くはない、御嶽も駒嶽も鎗
岳も見える、實に開濶な天地である、御山の大將己一人といふ愉
快さである。三人共喜び勇んで進んだ、處が意外にも霧が……名
物の濃霧が向の方から起つて來た、瞬たく間に西も東も分らなく
なつた、風はピューピューと劇しく吹いて來る、濕つぽい寧ろ雨
の小粒の集團といつた樣な濃霧が、吹き來り吹き去り、衣服は益
濕つて來る、寒さは膚をつんざく程である。さすが血氣の青年も
殆んど爲すべき道を知らない、無闇に前に駈け昇つて見た、然し
一の樹もなき草もなき火山の兀山、勿論憩ふべき洞窟も小屋もな
い、右に走つて見ても何も見當らぬ、左に行くも同樣である、も
と來し道を走り下つても、兎ても容易に山麓には行かれない、寒
さは刻一刻に迫つてくる、腹は空く、こうなつては勇氣もなにも

あつたものでない、共に顏見合はせては涕の下るのみである、想
ひ起すは故郷の空、親しき血を分けた同胞の身の上である、悲し
みに悲しみ、悶へに悶へる、体温は次第に減つてくる、手は凍る
足は感覺がなくなる、終に歩行も出來ずなつた、一刻一刻に氣も
遠くなつて、とう〳〵寒さと飢とは終にこれらの青年を奪ひ去つ
た。後日救助者の言に聞くに、嗚呼惨れ、何れも直徑一尺大の石
の側に仆れて居つた、これは少しでも寒風の當ることの寡き場所
に身を置く爲めであつたらしい、如何に無情の風が強かつたので
あるか、其の人々の服裝を見ると、一人は浴衣一枚を身に着けし
のみで死骸となつて居た、一人の厚きシャツを着て居た方は蟲の
息が通つて居つた、この方は同胞の手厚き救助によつて蘇生した
とのことである、案内者の剛力も無論死んだ。これ等は實に慘鼻

の極である。かく前途多望の身命を捨てたと云ふものは、要するに全く不注意の結果といはねばならぬ、自ら招きたる過ちといはねばならぬ、誰をも咎むべきで無い。

同上　二

も一つ是より甚だしい實例を擧げよふ、夫は、今から三年前即ち明治四十年の夏、我新領土樺太での出來事である、樺太の東岸多來加といふ灣頭なる、樺太第一の大河ボロナイ河口の右岸に敷香といふ一寸した部落がある、此處には支廳とて內地の郡役所位の役所がある此の役所には成富淺一氏が今も尙ほ長となつて居らるる。或る日一人の青年が此の役所へやつて來た、成富氏は青年に向つて此の地に來た目的を尋ねた處が是非とも國境の五十度線

地方に行きたいとのことである、勿論糧食も何も携帶して居らぬ、成富氏は百方其の無謀なる所以を說き聞かせたが、青年はなか〳〵屈服しない、自分は糧食も何もいらぬ此の逞ましき筋骨と此の精神で行くのである、あなたが疑ふならば此のボロナイ河に飛込んで自分の力を御目にかけるなどゝ氣焰萬丈である、成富氏は懇に諭すのに五十度線迄はまだ數十里ある、人家は無論ない、食物を得るにも途がないたとひ鬼神たりとも一人位でとても行き得べきものでない、たつて行きたいならば今十數日待て、さすれば自分が行くから其の時伴れて行つてやろう、日露の境界劃定委員も其の頃は行くからと赤心こめて說いたが聞かない、そこで成富氏は左程分らぬならば、予は警察權力を以て汝を抑留すべしと激語するに及び始めて降參した。然るに翌朝になつて見ると其の書生は

蔭も形もない、彼は、前夜人の熟睡するを待ち臺所に入つて澤山の握飯を用意し夜中出發したのであつた、無論ボロナイ河を泳ぎ越したのだ。成富氏はどうなつたかと常に心配して居つた。後境界劃定員諸氏が五十度線の東部に行つたとき大木に書置があつたのを見付けた、夫は諸君を待つて居たが兎ても待ちきれぬから引き還すといふのであつた、又後日ボロナイに近き東岸の地に於て一青年の水に浸つて死んで居るのが見付かつた、石に腰をかけ、水を飲うとして前にのめつて起る力もなく其儘死んだのであつた。懷中した手帳の日記を見ると、今日は幾里位歩いた、食物には魚の死んだのを食つた、鳥の肉を食つたとか卵を拾つて食つたとか絶壁から轉り落ちたとか境界劃定委員が來ぬので絶望したとかの文字が見える、其の文字が手帳の終りに近づくに從つて字劃が次第に判明を失ひ終に分らずなつて居つた。又身體は衰弱の極に陷り手足の爪などは磨り切れて居た岩などにかぢりついた爲めであつたらう。此の青年の希望は境界劃定委員の一行よりも早く彼の地に到着して委員諸君を驚ろかしてやろうといふ淺薄なる一種の名譽心から出た結果であることが日記で分明した、實に憐れな名譽心である。

無鐵砲なる自稱探檢家ほど危險なものはない、世の探檢に從事せんとするものはよくよく、注意に注意を加へ、準備に加ふるに準備を以つてすべきである、大なる旅行ほど、大なる準備を要する、人事の限りを盡して仆るゝは運命で致し方がない。然るに人事を盡さずして、前に記したる人々の如き結果に立ち至らば、君に對しては不忠の臣となり父母に對しては不孝の子となる、實に

考へなければならぬことである。

予は我が同胞中に眞の大探檢家の出でんことを望むで止まぬのである。

二　地球上探檢の餘地ありや

兩極地方

米國のピアリーは已に北極に到着した、英國のシャックルトンは殆んど南極に接近した、日本の白瀬中尉や、英、米、獨等の探檢隊は今や競ふて南極點に達せんとして居る。世界は小なり探檢すべき區域既に終れりや、謂ふなかれ、北極を探檢するは極に到るを目的とするものに非ず、未知の地域を調査するのが眼目である、極に行つたとて何になる、彼のナンゼンは極には行かなかつたが、其の調査の結果は空前であつた、或は昨年北極に到達したピアリー以上であるかも知れぬ、否予はナンゼンの北極探檢の功勞は北極探檢者中に於て空前絕後であると信ずる。

北極地方の海流の現況北米の北方に横はれる不明の區域、其の他尙研究すべき餘地は山の如くある、これらは是非共忠實なる學者の調査によらねばならぬ。

南極に於ても其の通りである、極を探るのも無論必要ではあるが、まだまだ不明の區域が澤山ある南極地方大氷塊の成因さへまだ一定したる說がないではないか。

日本近海

南極と北極、そんな遠い處でなくても直ぐ近所に不明の場所が山の如く積つて居て、人々の研究を待ちつゝある。

日本附近の海流……黑潮……對馬海流……親潮……リマン海流

日本近海の精密なる深度……溫度……比重

日本近海の生物……動物……植物……其の分布

等の研究はまだ充分ではないのである、殆んど手を着け始めたばかりである、亞米利加合衆國では、探檢船アルバトロス號を造つて常に附近の海洋の研究は勿論のと、遠く太平洋を横ぎつて日本にも度々來たではないか、昨年の如きもやつて來た日本の生物學者以外の人は殆んど之を知らずに居つた。自分の海を外國人に研究されて、夫を知らずに居ながら日本には南極や北極の探檢をする學者がないなどゝ、今更大言疾呼するのも少し變ではないか海洋探檢乘用の船位は是非共準備して置きたいものである。

亞細亞大陸其の他

また御隣の亞細亞大陸に行つて見れば、トランスヒマラヤは已にヘディン博士が充分なる調査をしたが、亞細亞の山はヒマラヤばかりではない、不明の山はトランスヒマラヤ許りでない、崑崙山脈も其一つである重大なる一つである。

天山山脈もアルタイ山脈も、まだ充分なる研究は出來て居らぬ。南極や北極の探檢も無論必要であるが、日本の青年諸君は爾來右の土地にも心を馳せて、後來東洋唯一の海洋學者、海洋生物の大學者、東洋のスエンヘヂン、ピアリー、シャックルトン否それ以上の大家となるべき心懸が肝要である。

……海をも探檢せよ……陸をも探檢せよ……

南極と北極

終

明治四十三年十一月四日印刷
明治四十三年十一月八日發行
正價金八錢

南極と北極

著作權所有

著作者　小林房太郎
發行者　東京市日本橋區下槇町十二番地　今津隆治
印刷者　東京市神田區雲島町三十四番地　金山佐次
印刷所　東京市神田區雲島町三十四番地　博與堂活版所

發行所　東京市日本橋區下槇町十二番地　電話本局四千八十六番　振替貯金口座六四三五番　如山堂書店

!!! 理想的畫集の出版 !!!

泉鏡花　森田草平
野枝　十棹　平福百穂
序君四　跋

名取春仙君著

デモ畫集

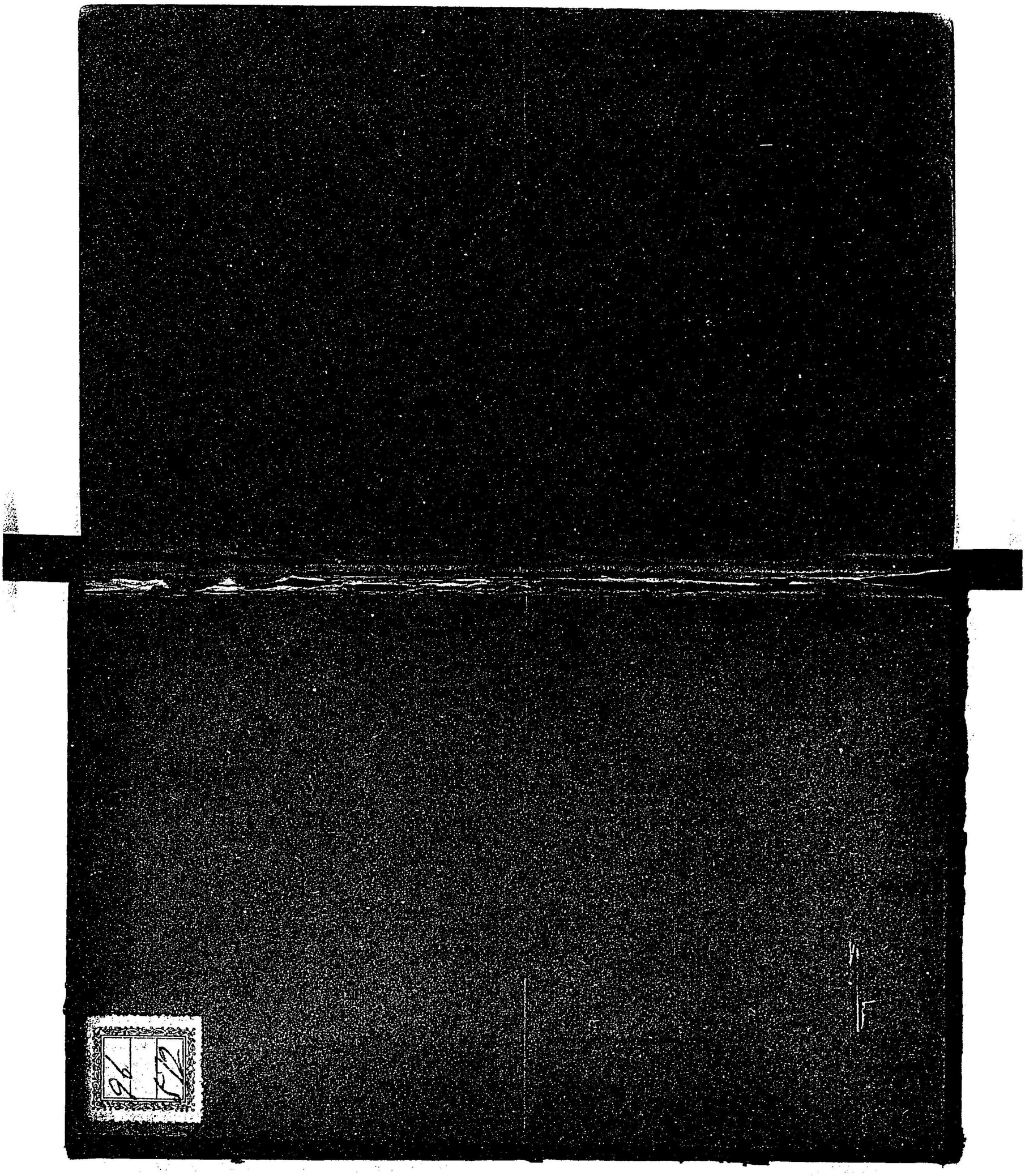
正價金壹圓拾錢

三千部限特價金九十五錢

郵稅八錢

「デモ畫集」は詩的漫畫を以て常に東京朝日紙上に其の妙筆を揮ひ識者の喝采を博しつゝある春仙畫伯の畫集也。

前半漫畫の部に於ては詩趣横溢せる都會のユーモアを見るべく、後半文藝畫の部に於ては漱石、藤村、草平等諸家の「春」「三四郎」「煤烟」等の繪卷物に對して人生の情景を見るべく、挿むに之等傑作中の名文を以てす。眞にこれデモと言ふ不謹愼にして謙遜的なる題名に反馳して然も清新と奇拔を兼備せる好箇の畫集也

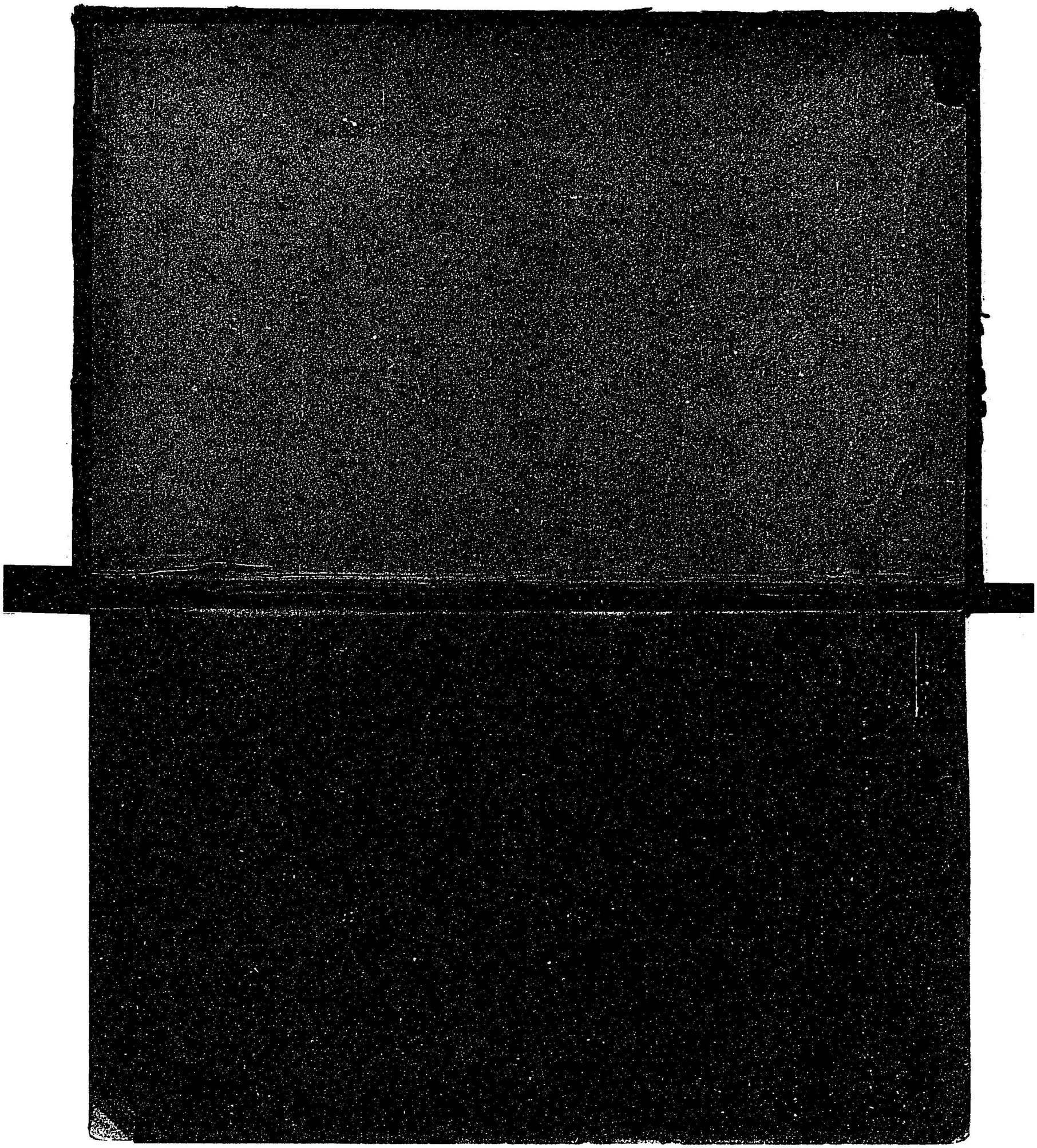


96
572

026990-000-7

96-572

南極と北極

小林　房太郎／著

M43
ADH-0010